

氏 名	富川 順子
学 位 の 種 類	博士（看護学）
報 告 番 号	甲第 43 号
学 位 記 番 号	看博第 4 号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	統合失調症を持つ人の resilience に関する研究 Study on Resilience in People with Schizophrenia
論 文 審 査 委 員	主査 教授 野嶋 佐由美 （高知県立大学） 副査 教授 森下 利子 （高知県立大学） 教授 宮上 多加子 （高知県立大学） 教授 畦地 博子 （高知県立大学）

## 論文内容の要旨

統合失調症を持つ人の resilience について、1) 個人の resilience 全体が示すテーマと 2) resilience の構成を明らかにすることを目的に本研究を行った。

統合失調症を持つ人の resilience とは、①個人が、統合失調症の発症とそれによって起こった状況を逆境として体験し、その逆境の中から回復し、新たな適応になるように、自分、周囲の状況、環境、これらの相互作用を変化させていく過程であり、②その過程を促進する個人の力であると本論文では定義した。

関東、関西、四国内の、当事者の生活を支える 5 施設を利用する人 33 名（男性 23 名、女性 10 名、平均年齢は 48.2 才、診断後経過年数は 5～43 年）を対象に、発病という逆境から回復して現在にいたるまでの体験について、ナラティブインタビューを行い、逐語録に起こして質的に分析し、個人の resilience のストーリーを作成した。1) そのストーリーが示すテーマについて、resilience をもっとも進めたものに着目しながら、個人の resilience 全体が示すテーマを分析した。2) ストーリーに含まれるカテゴリーを抽出し、すべてのストーリーのものをまとめて整理し、同じと考えられるものを《要素》とした。ストーリーごとに《要素》が生み出す resilience の【局面】を検討し、すべてのストーリーのものを統合して、統合失調症を持つ人の resilience を構成する【局面】と《要素》を分析した。

1) 統合失調症を持つ個人の resilience 全体が示すテーマは、①自信がないので頼れる人を見つけて従う、②しょうがなくアドバイスを受け入れて進む、③肯定的な人間関係を学ぶ、④失った家族の代わりをみつける、⑤損得を考えつつ人にまかせる、⑥同じ失敗を繰り返さないように考えながら進む、⑦できないことを受け入れて今できる生活を楽しむ、⑧求め続けて救いにたどりつく、⑨自分を赦して別の生き方を見つける、⑩あきらめずに何度でもうまくいくまで繰り返す、⑪普通でいる努力をし続ける、⑫自分がおかしいということを忘れる、⑬病氣と失ったものに対するつらさを忘れる、⑭現状を分析して結果を予測して対処する、⑮無駄な抵抗はせずにその時役に立つことをする、であった。

2) 統合失調症を逆境が回復への切望を強め、変わるための変化を促すという持つ人の resilience は【統合失調症を持つという逆境の体験】【逆境からの変化をのぞむ気持ちの高

まり】【統合失調症からの回復への取り組み】【回復の結果生まれる新たな適応】の局面によって構成されていた。

対象者は【統合失調症を持つという逆境】で《発病時に体験していた苦しい状況》と《症状がもたらす悪循環》を体験し、【逆境からの変化をのぞむ気持ち逆境が回復への切望を強め、変わるための変化を促すといううちの高まり】で《これまでの対処ではうまくいかない》中で《悪循環のはての気持ち》に陥ると同時に《回復するという覚悟をもつ》という変化を体験し、

【統合失調症からの回復への取り組み】の中で《自分の回復に取り組む》うちに《回復過程を促進する力》を発揮するようになり、やがて《回復している実感》と、一度は失った《希望の回復》を体験しつつ《ずっと続く葛藤》も抱えているという【回復の結果生まれる新たな適応】へと至っていた。

統合失調症を持つ人の resilience は、これまでの resilience 概念と同様に、逆境と新たな適応、変化、保護的な過程の4つを含むものであり、逆境が回復への切望を強め、回復への変化を生み出しており、どの局面においても各要素が複雑に相互作用しあって進んでいた。対象者の resilience を促進するためには、病気のつらさを和らげるとともに、人づきあいと普通の体験を大事にして、自分の目標に向かって少しずつ進む取り組みと、取り組みの効果を感じることができるように支えるケアが重要であろうと考えられた。

## 審査結果の要旨

「統合失調症を持つ人の resilience に関する研究」は、病者の回復に向けての軌跡を丁寧に記述した博士論文である。研究を開始した時点では、まだ《resilience》の概念は看護学領域には定着していない段階であったが、本研究者は、病者の有する力とそれを基盤としながら病者なりにしなやかに再生している病者の軌跡を探求するという勇氣ある決断を行った。そのうえで、研究の目的を、統合失調症を持つ人の resilience を明らかにすることで、統合失調症を持つ人の当事者主体とした recovery を促進するケアに役立てるとしている。

本研究のひとつの特徴は研究方法にあり、優れた専門看護師としての豊かな経験と病者の世界を共有する共感能力に基づいて、病者の世界に入り込みデータ収集が行ったことである。それゆえに、現象の本質を見事に切り取ってきている。

本研究の第一の成果は、病者がしなやかに resilience を獲得していることが判明したことである。病者は①頼れる人を見つけて従う、②しょうがなくアドバイスを受け入れて進む、③肯定的な人間関係を学ぶ、④失った家族の代わりをみつける、⑤損得を考えつつ人にまかせる、⑥同じ失敗を繰り返さないように考えながら進む、⑦できないことを受け入れて今できる生活を楽しむ、⑧何度でもうまくいくまで繰り返す、⑨求め続けて救いにたどりつく、⑩自分を赦して別の生き方を見つける、⑪普通でいる努力をし続ける、⑫自分がおかしいということを忘れる、⑬病気・失ったものに対するつらさを忘れる、⑭現状を分析して結果を予測して対処する、⑮無駄な抵抗はせずにその時役に立つことをするなどを行って、resilience を獲得していることを明らかにしている。

第二の成果は、統合失調症を持つ人の resilience は【統合失調症を持つという逆境の体験】【逆境からの変化をのぞむ気持ちの高まり】【統合失調症からの回復への取り組み】【回復の結果生まれる新たな適応】の局面からなることを報告している。そして、これらが【統合失調

症を持つという逆境の体験】から【逆境からの変化をのぞむ気持ちの高まり】、【統合失調症からの回復への取り組み】へと向かうこと、その先には【回復の結果生まれる新たな適応】に至るというプロセスを歩むことを示唆している。

第三の成果として、resilience を促進する病者の力として〈考える力〉〈受け入れる力〉〈自分を守る力〉〈楽しむ力〉〈人とのかかわる力〉〈社会に参画する力〉〈今できることをする力〉〈自分で成長する力〉が明らかになったことである。

本研究の独創的な成果は、病者の resilience 獲得の 15 の方略と 15 の能力、そして局面とプロセスが明らかになったことである。これらの成果は、精神保健医療福祉領域の臨床実践の場に、病者への教育や対処能力の強化などに有効に活用できる。

以上のことから、本審査委員会は、「統合失調症を持つ人の resilience に関する研究」は学位授与に値する研究論文であり、学位申請者 富川 順子 氏が、博士（看護学）の学位を授与される資格があるものと認めた。